福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

# 報告
# 観念論か観念論の克服かーヘルダーリン研究の課題



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-05-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 四日谷, 敬子<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10098/5332 |

福井医科大学一般教育紀要　第5号（1985）

# 報告：観念論か観念論の克服か
## ――――ヘルダーリン研究の課題

四　日　谷　敬　子

ドイツ語教室

（昭和60年10月8日　受理）

少数のロマン派の詩人達（A. W. Schlegel, Achim u. Bettina von Arnim, C. Brentano etc.）の共鳴は見出したものの、「自我」を確信していた観念論の時代、またこれに続く時代の自然主義的な傾向のために、殆んど一世紀に亘って忘れ去られていた詩人Friedrich Hölderlin（1770―1843）は、今世紀初め、古典文献学者Norbert von Hellingrath（1888―1916）に依って、本来的な意味で再発見された。それは彼が、München 大学でヘルダーリンに依るピンダロスの翻訳に関して学位を得る為に、当該の草稿をStuttgart 州立図書館所蔵の遺稿中に発見した時のことであった。　このヘリングラートの学位論文は、*Pindar-Übersetzungen von Hölderlin*. Prolegomena zu einer Erstausgabe という標題の許に1910年ミュンヒェン大学のO. Crusius に提出されたが[1]、彼は更にヘルダーリンの批判的全集の刊行を計画し、その内後期讃歌を収める第四巻（1913）と翻訳を収める第五巻（1916）の二巻が、尚も彼がVerdun で戦死する前に刊行された。

このヘリングラートの発見によってヘルダーリンへの理解を深められたStefan George（1868―1933）は、既に1914年第一次世界大戦勃発直後に、三部作『ヒュペーリオン』(jetzt in: *Das Neue Reich*) を雑誌『芸術草紙』(*Blätter für die Kunst*. 10. Folge) に発表し、新たな時代の到来をヘルダーリンの方から期待したが[2]、更に第一次世界大戦後の1919年には、後期讃歌からの主導句を伴う頌詞『ヘルダーリン』(jetzt in: *Tage und Taten*) を同一の雑誌（11., 12. F.）に発表し、この詩人の発見期を完了した。ゲオルゲにとってヘルダーリンは「偉大な予知者」(der große Seher) に他ならず、その「予言的な書」（das sibyllinische buch）は、「秘密と告知の知られざる世界」(eine unbekannte welt des geheimnisses und der verkündung) を開くものであった。「アポロ」のみを認識していた「古典主義の巨匠達」に対し、ヘルダーリンのみが「ディオニュソス」的な「言葉の源泉」にまで潜入した「言葉の更新者」(der verjünger der sprache) にして「魂の更新者」(der verjünger der seele) であり、「彼は、一義的には分析し得ないその諸々の予言に依って、次のドイツの将来を担う礎石であ

り、新たなる神を呼ぶ者（der rufer des Neuen Gottes）である」と称えられた[3]。　そしてこのようにNietzsche 的に解釈されたヘルダーリンこそは[4]、1933年に勃興した国家社会主義（Nationalsozialismus）に依って、民族、血、土地等のスローガンに結びつけられ、世界支配の指導者に仕立て上げられて行ったのである。

併し「純粋な精神」に基づくヘルダーリン研究が死に絶えたわけではなく、これは間もなくゲオルゲの一面的なヘルダーリン像から解放された。こうして30年代から40年代に掛けての研究は、二つの大きなテーマを巡って為され、1)一つは、ヘルダーリンに於ける「神話的なもの」（das Mytische）の本質の問題であり[5]、2)もう一つは、ヘルダーリンに於ける詩と哲学との関わり合いの問題であった[6]。併し孰れのテーマの研究にも共通して言い得ることは、これらがヘルダーリンの神話的＝宗教的経験を強調することに依って、彼を観念論の直中で観念論の克服を目指した詩人として解釈することである[7]。

M. Heidegger が『有と時』(1927) 以後の彼の思惟の危機の時期に、「有の意味への問」を「有の真性への問」として問い直し、未だ経験されざる「有の真性」の支点をヘルダーリンの詩の内に求めた時、このヘルダーリンはまさしくゲオルゲ的なヘルダーリンに他ならず、彼は自らの解釈を上述の如き歴史学的＝文学史的研究から鋭く区別した[8]。実際彼は、小説『ヒュペーリオン』(*Hyperion*. 1797, 99) や悲劇『エムペドクレスの死』(*Der Tod des Empedokles*. 1798—1799) は、詩人の遍歴時代に属するものであり、詩人の真の創造は、最初の讃歌『祭りの日に……』(*Wie wenn am Feiertage* ……　1800) に始まるとして、ヘルダーリンの発展史は全く顧慮せず、いきなり後期讃歌の解釈に入る。而もこれらの後期讃歌の内に、彼は真性の性起としての「詩の本質」のみを問う[9]。彼にとって思惟の歴史的使命の頂点は、ヘルダーリンの語を傾聴することの必然性を認識することであり、その際解釈とは、ヘルダーリンの詩の真性の企投を、将来的な現＝有がその内に揺れ動く省察の内に、基づけることなのである（1930年代後半の未発表の草稿 *Beiträge zur Philosophie* より)。併しこのように彼がこの詩人の詩作を、「神の到来乃至逃亡に関する決定」に関わるものとしてその「歴史的唯一性」(geschichtliche Einzigkeit）に於て捉え[10]、それをドイツ観念論との関連から全く切り離したことに依り、彼の解釈も結果的にはやはり、「観念論の克服」という当時の研究方向を助勢したと考えられる。ハイデッガーのヘルダーリン解釈を、B. Allemannのように全くハイデッガーの立場を前提して叙述するのでも、またTh. W. Adorno のように文学史的な酷評に委ねるのでもなく、両者の出会いの仕方とその所以とを解明し、そこから我々にとっての哲学的な問を汲み出すこと、それは未だに一つの大きな課題である[11]。

さて詩人の百回忌記念祭（1943）に、外面的には国家社会主義的な色合いを帯びて結成されたHölderlin－Gesellschaft（そのDokumentは、その機関誌 Iduna. 1. Jahrg .(1944) ）は、第二次世界大戦終了と共にフランス占領軍に依って解散を命ぜられた。その後直ちにP. Kluckhohn の努力に依って、1946年10月に、新たにW. Hofmann 並びにF. Beißnerを中心に、Fried-

rich Hölderlin - Gesellschaft が発足しはしたものの[12]、ヘルダーリン研究の方は危機に陥り、暫く休止状態が続いた。このような状況の下で、1954年London の古本屋で発見された讃歌『平和祭』(*Friedensfeier.* 1802) は[13]、研究に新たな活気を与え、特にこの詩の中の「祝祭の君主」(der Fürst des Festes) の許に一体誰が理解されているのかという問題（キリスト説、ナポレオン説、民族の守護神説、平和の神説等々）を巡って、激しい論議が交された。また戦前から着手されていたバイスナーを編者とする新しい批判的全集 (StA)[13a] の刊行が進行するに連れて、研究の基礎が固められ、今日P. Böckmann, E. Staiger, Fr. Beißner, A. Beck, W. Binder 等の専門的研究に依って、ヘルダーリンの後期の作品の解明が進められている。

中でもビンダーの大きな識見 (Kennerschaft) は凌駕し難い。彼のテーゼの一つは、ヘルダーリンがホンブルク時代 (1798—1800) の悲劇『エムペドクレスの死』に於て比喩的に叙述したものは、「観念論の絶頂、危機、そしてその克服」である、というものである。即ちエムペドクレスという形態の内で自然乃至存在がその自己意識に達するという思想は、まさしく「観念論の絶頂」を示唆するが、このような自然との緊密性の直中で、エムペドクレスの犯すヒュブリスは、「観念論の危機」を意味し、最後にエムペドクレスの犠牲の死を通して意識が存在に帰還するのは、「観念論の没落」にしてその「克服」であって、此処に英雄の死を介して自己を顕示するとともに自己を隠す神という新たな存在理解が開かれ、ヘルダーリンの後期讃歌はこの「自己を顕示するものの隠れ」に呼応せんとする詩的な試みである、というものである[14]。従って今日のヘルダーリンの専門的研究も、詩人の本来的な創造を、まさしく観念論を通り抜けてではあれ、やはり「観念論の克服」の方向に見出さんとしていると考えられる。

併し1960年代以来、ヘルダーリン研究のもう一つの原動力となっているものに、Hegel の発展史的研究並びに初期ドイツ観念論の成立史的研究があり、この場合は当然のこと乍ら、ドイツ観念論の成立に寄与する限りでのヘルダーリンが前面に打ち出される。元々ヘルダーリンとヘーゲルというテーマに関しては[15]、既にW. Dilthey がその『体験と詩』(1906) に於て[16]、ヘルダーリンのエムペドクレス形態とヘーゲルのイエス形態とを比較したが、ゲオルゲ派の Gundorf の許でこのテーマに関して教授資格を取得する予定であったJ. Hoffmeisterの精神史的な仕事は、グンドルフが亡くなったために、幾つかの論文として発表された[17]。併しこのテーマが決定的な局面を迎えたのは、1960年代O. Pöggeler とD. Henrich に依ってである。

1)先ずペッゲラーは、1913年に発見され、1917年Fr. Rosenzweigに依ってSchellingのものとして刊行された、所謂『ドイツ観念論の最古の体系プログラム』の執筆者として[18]、新たにヘーゲル説を提唱し、その前提としてフランクフルト (Hölderlin：1796—1798； Hegel ：1797—1800) に於けるヘルダーリンの影響を指摘したために、両者の思想的関係を巡る議論は改めて活発となった[19]。この執筆者問題は現在も尚決着を見ないが[20]、ペッゲラー説は次第に強力な支持を得ている[21]。そして若しもこのプログラム断片がヘーゲルに帰せられるとすれば、

このことが齎らす帰結として、従来イェナ（1801以降)に始まるとされていたヘーゲル美学(芸術哲学）の発展史が、修正されなければならない。Herder の意思を継いで、Fr. Schlegelが『ポエジーに関する対話』(1800）に於て「新たなる神話」(die neue Mythologie ）を提唱する以前、またシェリングがその『超越論的観念論の体系』(1800）の結びに於て、そのような「新たなる神話」が如何にして成立し得るかを問う以前に、既にヘーゲルが、ヘルダーリンやホンブルクの仲間達（I. v. Sinclair, J. Zwilling）と共に、「新たなる神話」を「理性の神話」として独自の仕方で要求していたことになる。後にヘーゲル自身に依って放棄されることになるこのテーマは、通常初期ドイツ・ロマン派に帰せられる。従って、同時に「ロマン派」の概念の適用も、改めて検討されなければならない[22]。

2)次にヘンリッヒは、1930年に突然浮かび上り、1961年のシュトゥットガルト版全集第四巻に初めて公刊されたヘルダーリンの断片『判断と存在』(*Urtheil und Seyn.* StA 4,1. 216f ）の詳しいDatierungと解釈を試み、Fichteの『全知識学の基礎』(1794／95）刊行から一年も経たない、1795年４月初めという極めて早い時期に、シェリングとは独立に既に形成されていたヘルダーリンのフィヒテ批判とその所謂「合一哲学」(Vereinigungsphilosophie)の構想を明らかにした[23]。また彼は、1964年には、当時Bebenhausen にあったヘルダーリン文庫所蔵のW. Kirchner の遺稿中に、ヘルダーリンとヘーゲルとの共通の友人 I. v. ジンクレア(1775—1815)の初期哲学草稿の写しを発見し、これを弟子のH. Hegel に刊行させ、彼女にジンクレアの発展史を叙述させた[24]。このヘンリッヒに依るヘルダーリンとフィヒテ哲学との関係の重視と周辺人物の発掘は、研究に大きな刺激を与え、G. Kurz は、ヘンリッヒと共に、ヘーゲルがベルン時代のカント主義を放棄したのは、ヘルダーリンの影響に依るとし、ディルタイと共に、ヘルダーリンのエムペドクレスとヘーゲルのイエスとの比較可能性を強調し、両者の革命の理解と生の概念に一致を見る。またクルツは、両者の相違としては正当にも、確かに二人共「媒介」を強調しはするものの、ピンダロス断片『最高のもの』(*Das Höchste.* StA 5. 285）に於て看て取り得るように、ヘルダーリンに於ては「直接性」が尚も優位を保っていることを指摘する[25]。今日では P. Kondylis が、ヘンリッヒの指導の許に成立したその学位論文に於て、ヘルダーリンの合一哲学を『ヒュペーリオン』迄追跡し、詳細に叙述しているが[26]、まさしくヘンリッヒと共にホンブルク時代の考察を省いたのは致命的であり、またヘルダーリンの発展史の枠組の中で同時に追跡されるヘーゲルとシェリングとの発展史に関しては、その不正確を批判される[27]。

さてペッゲラーは、ヘンリッヒのこのような業績は評価し乍らも、彼がヘルダーリンとヘーゲルの「哲学的議論」(Philosophieren）のみを一面的に扱い、彼等の「政治的議論」(Politisieren ）を看過している点、またヘンリッヒがヘルダーリンのフィヒテ批判がヘーゲルに与えた衝撃を重視する余り、彼のヘルダーリンとの対決の内に既に後の弁証法の形成を見出さんとすることを、行き過ぎとして批判した[28]。ペッゲラーのこれらの批判を顧慮しつつ、主に1797年

から1800年の間の二人の哲学的並びに政治的対話の展開を跡づけ、特に悲劇『エムペドクレス』の考察を省いたコンデュリスに対し、ヘルダーリンのホンブルク時代に於ける「反省」の再評価を強調したのが、ペッゲラーに提出されたC. Jamme の学位論文である[29]。彼は、ヘルダーリンが決してラディカルにフィヒテを拒絶したのではなく、寧ろフィヒテの思想を斉合的に思惟し抜こうとしたに過ぎないという仕方で、ヘンリッヒの把握を変様し、フィヒテ克服の為に想定されたスピノザ的な一なる存在の静的な構想が、如何に断片『判断と存在』以後次第に力動化され、遂に悲劇的な生の行程として「弁証法的」に把握されるに到るかを追跡すると同時に、ヘーゲルに関しては、先ずフランクフルトでのヘルダーリン受容に対する準備をベルン時代の内に求めた後、断片『信仰と存在』(1798) に認められるヘルダーリンの影響が如何にこの後克服され、とりわけ『キリスト教の精神とその運命』の第二草稿 (1799 od. Anfang 1800) に於ては、自らの内に分離（反省）を含みつつ再合一に到る生の概念に到達しているかを初めて確認した。その際ヤンメは、「反省」の再評価という点に関しては、ヘーゲルの方の先導を認めるようであるが、併し全体としてヘルダーリンの悲劇の構想を後のヘーゲル弁証法の先取として解釈する[30]。こうして二人の友人の関係を解明せんとする研究は、ヘルダーリンを観念論の歴史の中に組み入れるようである。両者の思想的関連を証拠立てる直接の資料が決定的に欠如していることを考慮すれば（ヘーゲルのフランクフルト時代には、かの有名なシェリング宛書簡一通以外には、Nanette Endel 宛の五通の手紙以外には何も残っておらず、またヘーゲル自身もこの時代については生涯沈黙を守っている。僅かに元ホンブルク宮廷の公女でプロイセンの公妃 Marianne の証言するヘーゲルとの会話（StA. 7,3. 119. LD 520）等から、両者の深い思想的関係が窺われる）、このヤンメの研究は正当に評価されて然るべきであろう。

併し乍らヤンメに依ってイェナ以後のヘーゲル弁証法の先取として解釈されたヘルダーリンの悲劇的生への洞察は、それ自体としては決してヘーゲル的な概念弁証法へと必然的に展開して行き得るものでないことは、注目すべきことである。確かに両者の拠って立つ地盤は、絶対者の自己分割という同一の思想であったかも知れない。併し乍ら其処から両者が引き出したもの、それは全く逆のものであった。一なる存在の自己分割とエムペドクレスの犠牲の死に於ける再合一という生の行程からヘルダーリンが看取したものは、ビンダーの表現を借りるならば、自己自身を隠すという仕方でのみ自己を顕示する「隠れた神」(deus absconditus) に他ならず、それは、この神を自我と同一視し、これを知り尽くしたと自負する「観念論」との訣別を意味したに対し、イェナ以来のヘーゲルは、まさしくこの生の行程の内に、絶対者の何等隠れるところなき全き現前を見、これを概念に依って論理化する絶対的観念論の道を歩むのである[31]。すると我々は、元々ヘーゲルのイエスと比較されたヘルダーリンのエムペドクレス、またヘーゲル弁証法の先取と解釈されたヘルダーリンの悲劇論は、真に詩人の意図に対して正当であるのかという疑問を抱かざるを得ない。「美わしい宗教」の可能性の制約を、歴史家として冷静に追究するヘーゲルの宗教批判的研究の根底には、神的なものもまた過ぎ去るという、詩人ヘル

ダーリンの悲痛な経験が存していないことだけは確かである。

こうしてヘルダーリンがエムペドクレスの悲劇を中断し、自らの「詩人の使命」を確信して、後期讃歌の最高の創造の時を迎えた1800年、二人の疎遠は始まる。最早友人の詩作の世界で起こっていることについては何も知らなかったヘーゲルは、1800年11月2日附きの有名なシェリング宛書簡に於て、今やシェリングの内にのみ自らの友人を求め[32]、イェナ移住後は『ヒュペーリオン』的な「ギリシア心酔」(Gräkomanie) を「夢想」(Träumerey) として糾弾し[33]、「芸術の終末」(芸術の過去性) のテーゼへと導かれることになるその美学の基礎を敷く。他方ヘルダーリンの方は、讃歌『平和祭』(1802) に於て答える (StA. 3. 533):

"Ein Weiser mag mir manches erhellen; wo aber
Ein Gott noch auch erscheint,
Da ist doch andere Klarheit."

「賢者は私に幾多のことを解き明かすかも知れない。しかし
或る神がなおもまた現われるところ、
そこにはやはり別の明澄さがある。」

そして彼は讃歌『パトモス』(*Patmos*. 1803) に於て、ヘーゲルが芸術に拒絶し、哲学にのみ要求する究極の問を問うのである。従って二人の関係の追究は、遂にはヘーゲル美学との対決に、導かれざるを得ないであろう[34]。

それにつけても望まれるのは、ヘルダーリンの後期の作品の全体的な解明である。この解明が尚も課題である今日、観念論か観念論の克服かという問題は、早急には結論を下し得ないであろう。前提されるのは、1)後期讃歌の地平を理解可能にするようなヘルダーリンの発展史であり、2)これらの讃歌の基礎を成す、das Vaterländischeの適切な理解であり、3)そしてヘルダーリンの神学の解明であろう。

## 註

(1) その内容に関しては、vgl. *F. v. d. Leyen : Norbert von Hellingrath und Hölderlins Wiederkehr*. In : Hölderlin-Jahrbuch (=HJb). 11(1958-60), 1-16, bes. 4-12.

(2) Vgl. *S. George : Werke*. Ausg. in 2 Bänden. 2. Aufl. Düsseldorf, München 1968. Bd 1. 405f.

(3) *Ibid.* 520f.

(4) Vgl. *G. Martens : Hölderlin-Rezeption in der Nachfolge Nietzches*. In : HJb. 23(1982

/83), 66; 尚詩人としてのヘルダーリンとゲオルゲの関係に関しては、vgl. *H.-G. Gadamer: Hölderlin und George.* In:HJb. 15 (1967/68), 75—91.

(5) *P. Böckmann: Hölderlin und seine Götter.* München 1935 ; *W. Michel: Das Leben Friedrich Hölderlins.* Bremen 1940 ; *W. F. Otto: Der Dichter und die alten Götter.* Frankfurt 1942; *H. Gottschalk: Das Mythische in der Dichtung Hölderlins.* Stuttgart 1943.

(6) *K. Hildebrandt: Hölderlin. Philosophie und Dichtung.* Stuttgart 1939.

(7) 尚これら（註(5)(6)）の書のBesprechungenは、vgl. *A. Beck: Das Hölderlinbild in der Forschung von 1939 bis 1944.* In : Iduna. Jahrbuch der Hölderlin-Gesellschaft. 1. Jahrg. (1944), 203—224.

(8) Vgl. *Der Spiegel.* 30. Jahrg. Nr. 23 (31. V. 1976), 214：「ヘルダーリンは私にとって、将来の内へと指し示す、神を期待する詩人であり、従って単に文学史的な諸表象の内でヘルダーリン＝研究の対象に留まっていてはならない詩人である」尚ハイデッガーは、1934/35年の冬学期の講義に於て、P.ボェックマンの書（註(5)）に対して言う、「今『ヘルダーリンとその神々』に就いて書かれている。これは恐らく極端な誤釈であろう。これに依ってドイツ人にとって尚も切迫しているこの詩人は、今や遂に彼に対して『正当に』なったという仮象のもとに、最終決定的に無影響の内に押し退けられる」と（vgl. *M. Heidegger: Hölderlins Hymnen "Germanien" und "Der Rhein".* Gesamtausg. II. Abt. Bd 39. Frankfurt 1980. "Vorbemerkung"）。

(9) Vgl. *M. Heidegger: Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung.* 3. Aufl. Frankfurt 1963. 121, 126, 74, 98, 73, 114.

(10) *Ibid.* 7. "Vorwort".

(11) Vgl. *B. Allemann: Hölderlin und Heidegger.* Zürich, Freiburg 1954 ; *Th. W. Adorno: Parataxis. Zur späten Lyrik Hölderlins.* In : *Über Hölderlin.* Hrsg. von J. Schmidt. Frankfurt 1970. 339—377 (zuerst 1965); 尚文芸学の立場から見たハイデッガーのヘルダーリン解釈に関しては、vgl. H. J. Schrimpf : *Hölderlin, Heidegger und Literaturwissenschaft.* In : Euphorion. 51 (1957), 308—323. Vgl. auch *O. Pöggeler: Heideggers Begegnung mit Hölderlin.* In : Man and World. Vol. 10. No. 1 (1977), 13—61.

(13) Zuerst in : HJb. 1954. 1 — 7 erschienen. Bemerkungen zum Text : ebd. 9 ; jetzt in : StA 3. 531 ff. Vgl. auch HJb. 9 (1955/56).

(13a) *Fr. Hölderlin: Sämtliche Werke.* Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Fr. Beissner. Stuttgart 1943 ff (=StA).

(14) Vgl. *W. Binder : Hölderlins Dichtung im Zeitalter des Idealismus.* In : *ders. : Hölderlin-Aufsätze.* Frankfurt 1970. 22f ; Ders. : *Hölderlins Dichtung Homburg 1799.* In : HJb. 19/20 (1975—77), 82, 87.

(15) このテーマのForschungsbericht としては、vgl. *C. Jamme: "Ungelehrte" und gelehrte Bü-*

*cher. Literaturbericht über das Verhältnis von Hegel und Hölderlin.* In : Zeitschrift für philosophische Forschung. 35 (1981), 628—645.

(16) *W. Dilthey : Das Erlebnis und die Dichtung.* 8. Aufl. Leipzig, Berlin 1922.

(17) *J. Hoffmeister : Hölderlin und Hegel.* Tübingen 1931 ; *ders. : Zum Geistesbegriff des deutschen Idealismus bei Hölderlin und Hegel.* In : Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte (=DVjs). 10 (1932), 1—44.

(18) この断片の執筆者としては、更に *W. Böhm: Hölderlin als Verfasser des ältesten System-programms des deutschen Idealismus.* In : DVjs. 4 (1926), 339—426 がヘルダーリン説を唱えたが、*L. Strauß : Hölderlins Anteil an Schellings frühen Systemprogramm.* In : DVjs. 5 (1927), 679—734 に依って論駁され、執筆者は再びシェリングとされて議論は決着していた。

(19) Vgl. *O. Pöggeler : Hegel, Verfasser des ältesten Systemprogramms.* In : *Hegel - Tage Urbino 1965.* Hrsg. von H.-G. Gadamer. Bonn 1969. (Hegel - Studien. Beiheft 4). 17—32.

(20) Vgl. *Hegel-Tage Villigst 1969.* Das älteste Systemprogramm. Hrsg. von R. Bubner. Bonn 1973. (Hegel-Studien. Beiheft 9). 尚プログラム断片の原文は、この書の263—265.

(21) Vgl. z.B. *K. Düsing : Die Rezeption der Kantischen Postulatenlehre in den frühen philosophischen Entwürfe Schellings und Hegels.* In : *Hegel-Tage Villigst 1969. op. cit.* 53—90; *H. Holz : Die Struktur der Dialektik in den Frühschriften von Fichte.* In : Archiv für Geschichte der Philosophie. 52(1970), 78. Anm. 35 ; *A. Gethmann-Siefert : Die Funktion der Kunst in der Geschichte.* Bonn 1984. (Hegel-Studien. Beiheft 25). 87ff.

(22) Vgl. *Herder : Sämtliche Werke.* Hrsg. von B. Suphan. Berlin 1877ff. Bd I. 426ff ; *Fr. Schlegel: Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe.* Hrsg. von E. Behler. München, Paderborn, Wien 1958ff. Bd II. 312; *Schelling : Werke.* Hrsg. von K.F.A. Schelling. Stuttgart, Augsburg 1856ff. Bd III. 629; *O. Pöggeler : Die neue Mythologie.* Grenze der Brauchbarkeit des deutschen Romantik-Begriffs. In : *Romantik in Deutschland.* Hrsg. von R. Brinkmann. Stuttgart 1978. 341—354 ; *Ders. : Idealismus und neue Mythologie.* In : *Europäische Romantik* I. Hrsg. von K.R. Mandelkow. Wiesbaden 1982. 179—204.

(23) Vgl. *D. Henrich : Hölderlin über Urteil und Sein.* In : HJb. 14 (1965/66), 73—96.

(24) Vgl. *H. Hegel: Isaak von Sinclair zwischen Fichte, Hölderlin und Hegel.* Frankfurt 1971. 尚このように観念論の成立史の解明を、周辺人物の発掘に求める試みとしては、今日では *Homburg vor der Höhe in der deutschen Geistesgeschichte.* Studien zum Freundeskreis um Hegel und Hölderlin. Hrsg. von C. Jamme und O. Pöggeler. Stuttgart 1981がある。

(25) Vgl. *G. Kurz : Mittelbarkeit und Vereinigung.* Zum Verständnis von Poesie, Reflexion und Revolution bei Hölderlin. Stuttgart 1975. 11, 192,108f.

(26) Vgl. *P. Kondylis : Die Entstehung der Dialektik.* Eine Analyse der geistigen Entwicklung von Hölderlin, Schelling und Hegel bis 1802. Stuttgart 1979.

(27) Kondylis の書（註(26)）の Rezension としては、vgl. *A. Gethmann - Siefert : Rettung* der *Dialektik.* In : Hegel - Studien. 18 (1983), 259ff.

(28) Vgl. *O. Pöggeler : Hölderlin, Hegel und das älteste Systemprogramm.* In : *Hegel-Tage Villigst 1969. op. cit.* 225 ; *Ders. : Sinclair — Hölderlin — Hegel.* In : Hegel - Studien. 8 (1973), 10 ; *D. Henrich : Hegel und Hölderlin.* In : *ders. : Hegel im Kontext.* Frankfurt 1971. 35ff.

(29) *C. Jamme : "Ein ungelehrtes Buch".* Die philosophische Gemeinschaft zwischen Hölderlin und Hegel in Frankfurt 1797—1800. Bonn 1983. (Hegel-Studien. Beiheft 23).

(30) Vgl. *ibid.* 354ff, 361, 368.

(31) 拙論「存在と反省——ヘーゲルの絶対的観念論への道——」『現代ヘーゲル研究』所収 理想社 1986（準備中）参照。

(32) Vgl. *Briefe von und an Hegel.* Hrsg. von J. Hoffmeister. 3. Aufl. Hamburg 1969. Nr. 29. Bd I. 60.

(33) *K. Rosenkranz : G. W. F. Hegels Leben.* Berlin 1844 (Nachdr. : Darmstadt 1971). 181.

(34) ヘーゲル美学との、とりわけその「芸術の終末」のテーゼとの対決としては、従来、1)先ずこのテーゼの正しい意味を取り出す試みの代表的なものとして、*W. Oelmüller : Hegels Satz vom Ende der Kunst und das Problem der Philosophie der Kunst nach Hegel.* In : Philosophisches Jahrbuch. 73(1965), 75—94があり、2)次にヘーゲル美学の修正（Revision)に向かう代表的なものとして、*D. Henrich : Kunst und Kunstphilosophie der Gegenwart.* In : *Immanente Ästhetik — Ästhethische Reflexion.* München 1966. 11—32がある。特にヘンリッヒは、かのテーゼが、現代に於ては、芸術が形式の上からも、内実の上からも、「部分的」(partial ) になったことを示唆する点に於て、つまり現代美術の「部分的性格」(der partiale Charakter) のテーゼとして、意味あるものとした（15f )。併し最も新しい、最も大々的な修正を試みたのは、ペッゲラーに提出されたA. Gethmann-Siefert の就職論文 *Die Funktion der Kunst in der Geschichte*（註(21)）である。彼女は、哲学的美学の根拠づけの為には、かのヘーゲルのテーゼは何としても回避されねばならないが、併しこの同じ目的の為に、ヘーゲル美学から何としても救い出さなければならない認識が、つまり芸術が真理経験の歴史的な一仕方であり、歴史的＝社会的機能を有するというヘーゲルの洞察がある、ということから出発する（或る意味で、Gadamer の解釈学と Neomarxismus の美学理論との総合と解し得る)。其処で彼女はかのテーゼの修正に着手するのであるが、その際彼女は従来のようにヘーゲルの後の美学思想の方からではなく、若きヘーゲルの諸々の着手の内に修正可能性を求め、つまり簡単に言えば晩年のヘーゲルを若きヘーゲルに依って修正するという（ペッゲラー的な）行き方を取り、彼の発展史に於ける芸術の歴史的な規定を救う為に、それを後の体

系的枠組から切り離そうとする。そして彼女はこの試みを、全体として、ヘーゲルのSchillerとの対決の再構成として叙述したのである。その際彼女は、例えばヘーゲルのヘルダーリンとの対決に着目し得ない理由として、ヘーゲルがまさしくその『美学講義』に於てはヘルダーリンに一言も言及せず、従ってシラーとの場合のように、両者の関係の連続性が保証されないことを挙げている（24, 27)。後の意味でのヘーゲル美学が形成されるようになるイェナ中期（1803）には、ヘルダーリンには精神の闇が迫っているのであるから、此処には確かに学位論文や就職論文の作成に役立つ資料は元々全く存在しない。併し其処には何かそれだけで目を逸らしてしまい得ないものがある。何故そうなのか、また如何にしてそれを問の形に齎らし得るのかということは、筆者にとって課題である。